事務局 amateur スタッフによる

フォロー・アップ メモ・ランダム

特派員報告

金宇大先生は専門とする古代の金工品を研究する過程で、三重県の坂本遺跡から出土した金銅装頭椎大刀の復元に関わられたそうです。特派員はその坂本遺跡から数キロのところに住んでいることから、今回は坂本遺跡と金銅装頭椎大刀を現地調査しました。 坂本古墳群は150基以上ある大古墳群でしたが、開墾で壊され、7世紀に造ったとみられる前方後方墳の1号墳とそばの6基だけが残っています。平成7年から発掘調査が始まり、周囲に溝が巡る全長約31メートルの1号墳から金銅装頭椎大刀が見つかりました。大刀は13年に、古墳群は16年にそれぞれ県史跡に指定されています。

坂本1号墳

遺跡のある明和町は一列に並ぶ1号墳と方墳2基は、元の古墳に約1メートルの盛り土をして墳丘を復元し、方墳や前方後円墳の3基はそのままの状態で保存して史跡公園に整備しました。今年の1月20日に整備した同町坂本の県指定史跡「坂本古墳群」でオープン記念報告会を開いています。報告会には約70人が参加しましたが、特派員はこの情報を知らず参加できませんでした。（残念）

金銅装頭椎大刀は、金銅の金具で飾られていて、大刀を握る部分の先がこぶしのように膨らんでいることから、「頭椎大刀」と呼ばれています。これは日本独特のもので、今から約1400 年前の古墳時代に作られたものです。坂本1号墳から出土したもので、墓に埋葬されていた人が持っていたものを一緒に埋めたものと考えられます。この時代は大和王権が作られつつあり、その大きな力を示すために作られたのが、この大刀であったと考えられています。また、この大刀は大和王権に認められた、ごく少数の人だけに渡されたと考えられていることから、当時の明和町にも大きな力を持った人物がいたことがわかります。その人の存在が、当時の明和町に斎宮を置くきっかけになったのではないかとも考えられています。

【注：斎王とは飛鳥時代から約660年間にわたり、天皇に代わって伊勢神宮に仕えた未婚の皇女たちのことです。八世紀以降は伊勢斎王の宮殿を斎宮と限定して使われています。源氏物語の「賢木」、伊勢物語の「狩の使の段」、大和物語の36段藤原兼輔の和歌などに登場しています。】

実際に出土したものは、斎宮歴史博物館で保管されていますが、X線写真を使って、どのような素材で作ったか、作り方はどのようであったかなど、調査が行われました。そして平成11年度に、その結果をもとに当時の作り方を再現しながら、忠実に復元をおこない、金銅装頭椎大刀を現代によみがえらせました。金宇大先生はこのときの作業に協力されたのではないでしょうか。

金銅装頭椎大刀

右の写真は、近くのふるさと会館に展示されている復元品(上)と出土状態を再現したレプリカ品(下)です。ふるさと会館は図書館にもなっていて幾度となく利用しているのですが、二階にこのような展示物があることを知りませんでした。柄頭はきれいな局面をしていて、金宇大先生の言われるよう木型を設えないと難しそうですが、金工作家は難なく作業を進めたそうです。当金と呼ばれる独特の形状の道具と絞り技法がそれを可能にしているようです。

坂本古墳群は、古墳時代の一番終わりに造られました。飛鳥時代とも呼ばれている時代で、前方後円墳などの大きな古墳はほとんど造られなくなり、小さな円墳、方墳が数多く造られるようになります。坂本古墳群もそれと同様ですが、坂本1号墳だけは前方後方墳で造られており、周辺の古墳の中では、もっとも大きく造られています。

1号墳が周囲の古墳に比べてひときわ大きいことや副葬品の豪華さなどからみて、この地域の有力者であることは間違いないでしょう。しかし、なぜ前方後円墳でなく、前方後方墳なのでしょうか。さらには “最後の前方後方墳” であるらしいのです。伊勢に派遣されてから時々感じるのは、ヤマトと太い繋がりを持つ伊勢にありながら出雲の影が見え隠れすることです。

※ 古代史（弥生時代～飛鳥時代）に疑問をお持ちの方、疑問・質問・反論　大募集　（体裁は自由ですが、文書でお願いします）